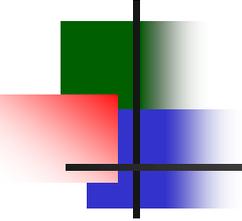




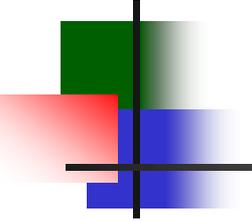
成績評価基準について

秋田大学工学資源学部
大好直



成績評価基準の考え方

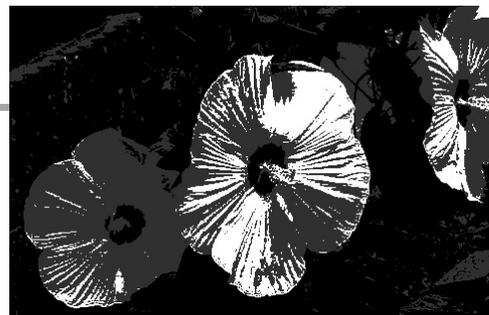
- 評価基準の必要性
- 大学の個性とルール
- 共通化の必要性
- なぜ段階評価か



教育のための成績評価基準を

- 授業内容のレベル設定
- 最大多数の最大教育効果
- 授業目的・教育の到達目標

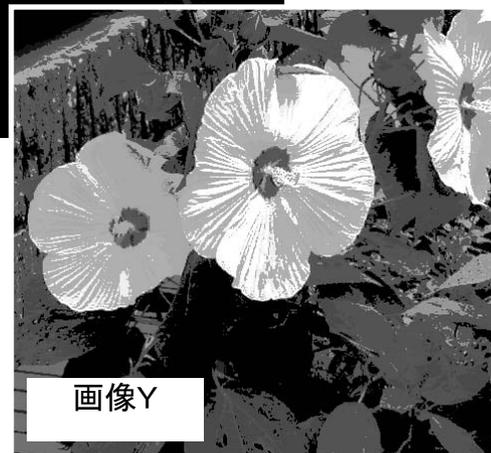
クラスの学習能力の把握



画像X



原画

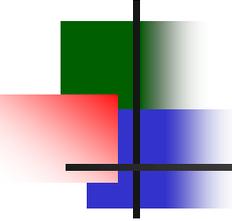


画像Y



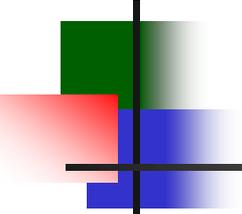
画像Z

図1 四階層化表示の濃淡レベル設定による違い



段階的成績評価基準ガイドライン

- 評価**A**: 授業の到達目標を五分の四程度以上達成していると認められ、他の関連分野においてもすぐに応用出来る。
- 評価**B**: 授業の到達目標の三分の二程度以上達成していると認められ、他の関連分野に応用する道を開くことが出来る。
- 評価**C**: 授業の到達目標を二分の一程度以上達成していると認められ、糸口が与えられれば、他の関連分野に応用する道を開くことが出来る。
- 評価**D**: 授業の到達目標を半分未満しか達成できなかった。他への応用も困難であり、再履修することが望ましい。



教育の到達目標の多様性

- **知識教育の重視**

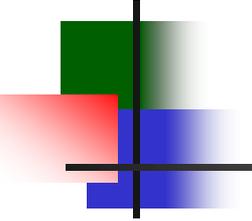
(知識として覚える → 内容理解 → 課題解決に活用)

- **態度教育の重視**

(望ましい態度を知る → 状況を判断して振る舞うことが出来る → 自然と振る舞うことができる)

- **技能習得の重視**

(真似る → 繰り返し訓練により身体をコントロールできる → 体得して反射的に出来る。)



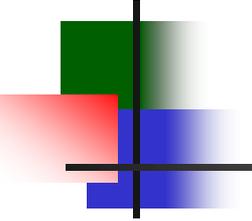
絶対評価と相対評価

- 絶対評価

主観的にならないように、予め成績評価方法を具体的に示す。評価基準を複数の教官で作成する。

- 相対評価

客観的であるが競争意識がでる。学生が結果主義に走る。教官の指導過程の問題点が隠れてしまう。入学試験で選ばれた学生は統計処理に馴染まない。



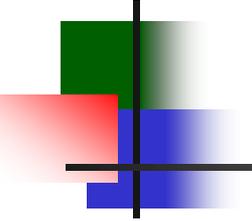
形成評価と総括評価

- 形成評価

教育効果を上げるために 途中で達成状況を確認する評価。教官・学生ともに反省の参考となる。

- 総括評価

最終的評価で履修単位と共に記録される。
人事的将来計画に使われる。



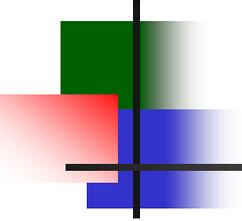
厳しい評価と厳格な評価

- 厳しい評価

教官の要求度が高く、授業内容のレベルが高い。
評価が辛い。自律的な思考が育ちにくい。

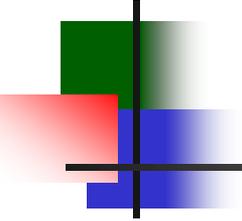
- 厳格な評価

客観性が高く、評価方針に一貫性があり、学生は
意欲的になる。



成績評価に関わる学外との関係

- 大学時代の学習歴、
- 個人の能力評価、
- 学生の質の保証
- 信頼のできる成績評価、
- 教育機関の社会的責任説明
- 教育機関間の教育プログラムの相互乗り入れ、単位互換



単位の合否判定に関わる配慮

- 担当教官が授業開講時に設定した教育目標に照らし合わせて判断する。
- 合格ラインの考えを、予め持っているべき。
- 不合格者が直ぐに特定できるような、公示方法は避ける。

まとめ

成績評価を重視した効用

1. 大学は、教育機関としての責任と姿勢を明示することにより、卒業生の質の保証と評価の信頼性の確保が出来る。
2. 学生は、学習目標を正しく把握することにより、学習成果を最大限に上げることが出来る。
3. 教官は、クラスの学習能力に応じて授業計画し、最大多数の最大教育効果を図る教育の実現につなげることが出来る。